

# 全電源喪失の記憶

証言 福島第一原発

## ■第2章「1号機爆発」

3

### 当直長の生きざま

「ベントを実施せよ」。福島第一原発所長の吉田昌郎(56)から1号機格納容器の蒸気を大気放出するベントの実施命令が下った。3月12日午前9時4分、待機していた突入チームのうち第一班が中央制御室を出発していった。原子炉建屋2階南東にある弁を25%開けてくるのが任務だ。第二班として控えているE班当直長遠藤英田(51)の準備を運転員たちが手伝っていた。突入チームに手を挙げられなかった作業管理グループの大野光幸(51)もその中にいた。今は自分でできることをやろう。遠藤に耐火服を着せ、空気ホンを背負わせた。

「おい、当直長ってのはないかーの時は…」と説明してくれたのも遠藤の脳裏にその光景がよみがえってきた。25年ほど前だ、このコートを入れたやつは「このコートを着たら放射線量の高いつも俺そうしているけど何かあったら最初に放射線量の高いところに行かなきゃならないんだ」



福島第一原発の構内で空気ホンを背負った作業員  
—2011年5月(東京電力提供)

## 「今が方が一の時だ」

「開けたぞー」  
「もう別に迷いも何もなかったぞ。第一班の作業は成功だった。2人とも汚染されているのは明らかです。遠藤は空間線量を計測する線量計を首から下げた。線量計は毎時千ベクレルまで測れるようにセットし保安班の住吉康一(43)が線量を計測してある。空気ホンの限度は20分で、時間も疲れ切っている様子で、ベントボトルの水をコップと飲んでいただ。第一班が開けた弁は格納容器の外側で、コングリットによって放射線が遮られている場所だ。それでも被ばく線量は最大25ベクレルだった。遠藤たちが向かう原子炉建屋地下の圧力抑制室周辺は、格納容器下部に当たる。地震後、まだ誰も入ったことはないが、線量は格納容器外側よりもはるかに高いだろう。午前9時24分、遠藤たち第二班は制御室を出発した。(敬称略。年齢肩書は当時。共同通信 高橋秀樹)